

牛島憲之作品に出逢って

〔創世期の創元会の主要メンバーであった〕

調査研究係 小川尚子

近代美術史の専門家でもある美術評論家の宝木範義氏が「ひとの長い一生を象徴するかのように、画面の奥へと果てしなく続く道を幻想的に描いて心に染み入る感動を誘った《道一筋》が第48回立軌展に出品されたのは、実に96歳の時だった。」と記している牛島憲之は、1900年熊本に生まれ、1997年に97歳迄画家として現役を貫いた作家であった。

それは常に第一線にあり続け、持ち前の鋭い感性で身の回りにある風景を魅力的な情景として捉え、柔軟な想像力を衰えさすこと無く、未だ類い稀なる作家人生をおくった画家であった。

牛島憲之の作品を紹介することで時代の変遷と彼の軌跡を辿っていく。



「芝居 (赤阪並木の段)」1927年 (昭和2)

牛島は1919 (大正8)年、熊本県立中学校を卒業、その年の美術学校受験に失敗し、洋画研究所に通い、入試勉強を始めたが、子供の頃好きだった芝居から歌舞伎に興味に移り、このころは歌舞伎ばかり観ていたようである。石膏デッサンが嫌いであったこともあり、美術学校入試は4度目ようやく合格したとある。

芝居「赤阪並木の段」はその頃の作品で「卒業制作には“猿芝居”を描き成績最低なり」と書いているが、これは第8回帝展に入選した作品で比較的暗い絵だが、この雰囲気と構図だけは、芝居を知りつくした人でないと描けない見事さであると言われている。



「貝焼場の風景」1933年 (昭和8)

美術学校時代の同級に猪熊弦一郎、岡田謙三、萩須高德、小磯良平、中西利雄、島野重之、山口長男がおり、彼らはパリ留学後、様々の賞を取り話題の人になって行った。当時、牛島憲之は、一向に自信が持てず、制作上悩み続けた時期であった。

しかし彼は永い間の苦しみや美術界の変動や流行の中にあっても只ひたすら自己の道を歩み続け今日の芸術を確立した芯の強さも併せ持っていた。

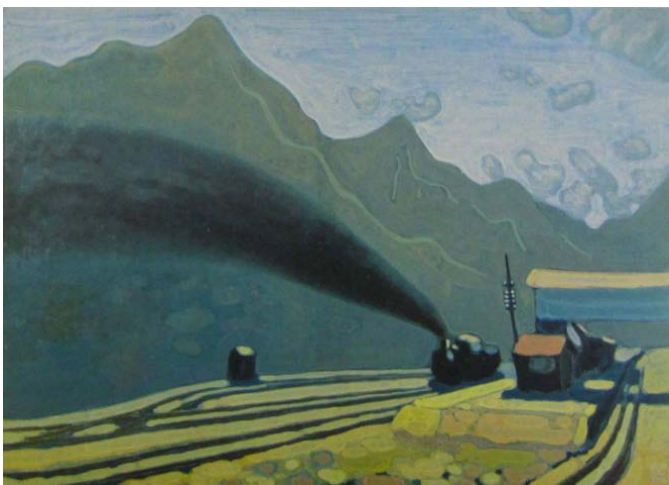
その頃の代表作として、1933年第14回帝展に4年振りに出品して入選した熊本県荒尾市近くの貝焼場を取材した作品「貝焼場の風景」と、翌年の第2回東光展に出品した東京湾幕張近くの貝焼場を描いた「貝焼場 (午後)」が上げられる。

荒尾市の「貝焼場の風景」は明るく美しい色調で画面の下半分に大きな窯で焼く作業場での情景を描き、小さな色面をモザイクのように並べる事で、貝殻のマチュエール感を出し、遠景の海に島や空の雲などは、ブルーとホワイトで明快に構成されのびやかな景色を演出している。



「貝焼場（午後）」1935年（昭和10）

1935年制作の東京湾での「貝焼場（午後）」は色彩が一層明るくなり、彩度の高い多彩な色面が画面にリズム感を演出している。左側約1/3の所に前景の建物を配し日影の暗さと、中景の作業場の日射しの強さが明るさを強調し、貝焼場の雰囲気を生き生きと描き出している。



「山の駅」1935年（昭和10）

牛島の作風はモザイクの様な色面の散らばった独特の表現方法からやがてのびやかな、やさしい曲線に変わり、原色味の強かった色から淡くやわらかな色調に変わって行った。それは「山の駅」の作品に変化が見られる。この絵が描かれた世相は2.26事件など、年を追って戦争の気配が濃くなってゆく暗い時代であったが、作品だけ見ていると、懐かしさを感じる山間にある駅をのどかな風景画として描き、不安気な世相等一切感じさせず画面の真中を風により黒い煙が大きく束になり一方向に流れる様を大胆に描いている。この頃から牛島の一つの特徴であるうねりと曲線が表れる。



「自画像」1942年（昭和17）

そして、新しい様式の作品は「赤阪見附」とみられ、彼も「この頃から私のスタイルがはっきりして来たようです。」と認めている。

「赤阪見附」や「昼の月」「自画像」「雨」は上社会展に出品され、その後1941年（昭和16）から創元展に「元朝」「立秋」「自白」を発表している。

この頃の作品は簡素でありながら大胆な構図で輪郭を感じさせずぼったりとした色面で画面が構成され、その色面の量感とやわらかな中間色の色調で対象物をより印象的に捉えられ魅力的でかつ味わい深い作品になっている。

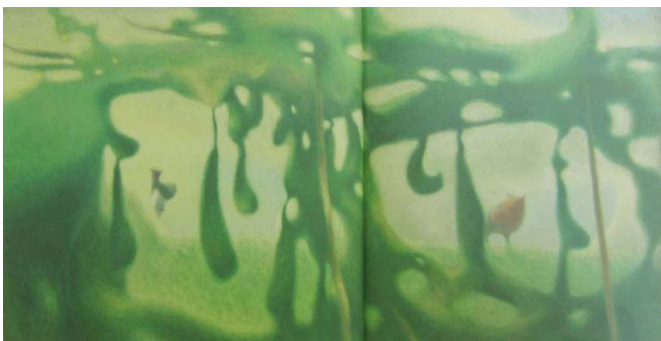


「立秋」1942年（昭和17）

戦争中の1944年（昭和19）頃、牛島は自分の様式にとらわれた制作態度に疑問を持ち、「第一歩からやり直すつもりで、忠実に自然を写すことに専念する。」と述べている。戦後日展第1回の復活展に出品した「残夏」、同年2回展が開催され特選となった「炎昼」は、写実への出直し作品となった。

これらの作品は、以前の作風にあった味わいの勝ったのどかな画面から構成力が強まり、密度の濃い引き締まった画面へと変化した。

「残夏」は糸瓜棚を前景にして奥の方に明るい光の中、左側に首に荷物を下げた人と右側に牛が点景として配し、緑で構成された画面は、夏のうだる様な暑さと、妙な静けさを感じさせる。



「残夏」1946年（昭和21）



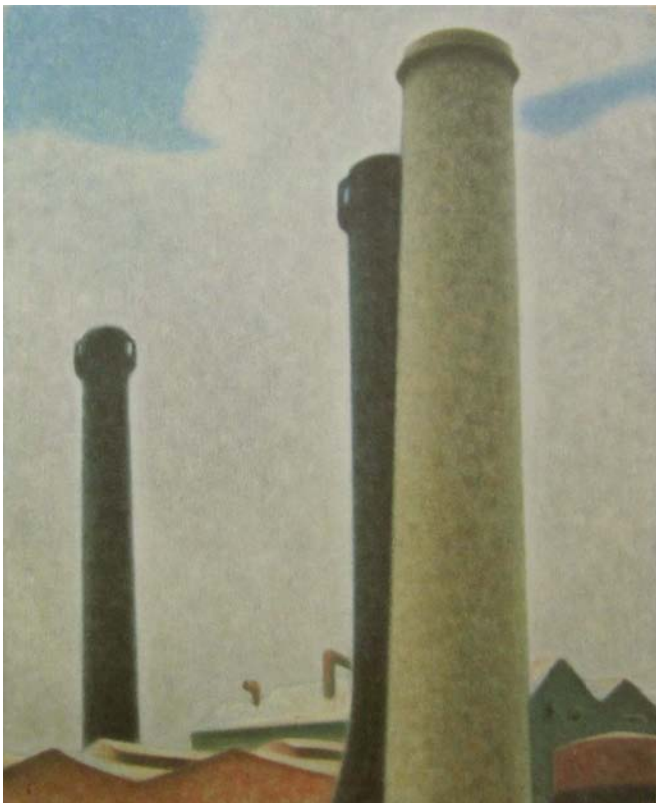
「炎昼」1946年（昭和21）

同年の「炎昼」という作品も、更に色調が明るく、光に溢れた画面で、前景にカボチャの蔓や葉や実を「残夏」よりも殊に大きく配し夏の厳しい暑さを思わせる。

光の遠景に1本の電柱と屋根の一部を点景として配している。

この頃の絵肌は、以前のぼったりとした量感のある作風から筆のタッチが見えないピッチリと絵の具のついた作風で「一つの色を出すにも原色を置き、その上に白を塗って色を抑え、又色を重ねては白で押さえる。何回となく繰り返される反復」によりキャンバスの奥の方から漂う複雑なニュアンスと単純化された画面に魅力を添えている。

特選となった「炎昼」について、彼は「私のスタイルがこれで確立したと言ってもよいのかも知れません。」と語っているように、従来の風景画には見られない独創的な構図と色彩で日本の風景画としての常識の枠を超えて大きな変革をもたらしたと言っても過言ではないだろう。



「煙突の風景」1950年（昭和25）

彼は戦後、制約の無い広い自由な角度から、アトリエ周辺や東京近郊の各所、多摩川、佃島、京浜工業地帯のクレーンのような幾何学的な形、家、タンク、煙突、鉄橋、水門等の垂直・水平の形態など、日本各地に取材を重ねた。

うねるような曲線と盛りあがるような量感のあるフォルムが戦前にはよく見られた特徴であったが、「煙突の風景」を発表したこの頃の作品は直線の要素を持った画面が多く見られる。

工場の屋根を下部に配し、3本の太くて長い煙突を中心に構成し。背後に青い空が雲の間から覗いている。全体の印象は静けさをたたえた音の無い世界であるが、わずかに覗く青空があることで、無機質な対象物でありながら冷たさを感じさせない暖かみをたたえた作品になっている。



「水門（水辺）」1952年（昭和27）

「水門（水辺）」は「直線が主体であるのはこの頃の作品の特徴ですが、画面に直線が多くなってくると、かえって曲線が目立ってくるのはおもしろいと思います。」と作者が語っているが、確かに直線だけで構成される作品では、重苦しい冷たい印象になるし単調になるので、どこかに曲線を入れると良いとは理解していたが、彼の表現する直線は、角の取れた丸みのあるやわらかな直線で水面のコンクリートの面でさえも、複雑な色をたたえ、そのやわらかな色彩は、まるで人肌のような暖かみを感じさせてくれる。水辺のどこにでも有りそうな風景を見ていると何かホットさせる様な風景画になっている所に彼独特の個性を感じる。



「灯台のある島」1984年（昭和59）

彼の自然と人工との調和の作品は、ふたたび自然に戻って行き、水辺に立ち返って行く。

「灯台のある島」は「下田にある小さな島、静かな海に浮かぶ島影の美しさ。必要なものだけを残し、あとは捨てました。」と彼は述懐しているが、この作品のように、彼は絵を表現するのに、必要とするものだけを構図とやわらかい色彩で表現し、牛島独特の境地を築いている。この作品を見ていると夢の世界に入り込んだような暖かい空気に包まれた心地良さを感じる。

牛島は1949年（昭和24）須田寿、飯島一次らと共に創元会を退会して官展を離れ、立軌会を結成し最後迄同会を活動の主要な場とし、冒頭に述べた第48回立軌展へ出品した「道一筋」が最後の作品となった。

掲載した写真は、渋谷区立松濤美術館が2011年4月5日から5月29日迄開催した「開館30周年記念特別展 牛島憲之 至高なる静謐」の展覧会図録による。

◎参考資料

創元会60年史

日経ポケットギャラリー「牛島憲之」

牛島憲之の画風の変遷について今泉篤男「牛島憲之の人と芸術」

生誕百年記念 牛島憲之展「牛島憲之の芸術」 府中市美術館長 村山鎮雄

朝日新聞社 2000年